

2014年度版「戦場に輝くベガ—約束の星を見上げて—」のポスター

プラネタリウム番組

# 戦場に輝くベガ

約束の星を見上げて

星が武器としてではなく、  
希望の光として輝ける日が  
来ることを祈っています。

プラネタリウム番組「戦場に輝くベガ」

約束の星を見上げて

# 終わらない物語

星がつなぐ人・時・想い

「戦場に輝くベガ —約束の星を見上げて—」(以降、「ベガ」と記す)は、太平洋戦争中の天文航法をテーマにした山梨県立科学館のオリジナル番組。知られざる事実を掘り起して描いたこの物語は、2006年に投影されて以降多くの反響を呼び、新たな調査・研究も進み、さまざまなメディアにも発展していった。2014年、その間の進展も踏まえ、完全リメイク版として生まれ変わったことを機に、この番組が内包するさまざまな意味や側面について語ってみたい。

文●高橋真理子、跡部浩一  
協力●五藤光学研究所／山梨県立科学館

## 1

### 番組のあらすじ

時代は、太平洋戦争末期の1943年(昭和18年)から1945年(昭和20年)。主人公である大学生の和夫と、幼馴染みで女学生の久子は、和夫が第13期海軍飛行予備学生として入隊する前夜、天の川を見上げながら「さびしい時や苦しい時には、あのベガを見上げるんだ」と約束を交わす。

その後、和夫は海軍の陸上爆撃機「銀河」に乗り込む偵察員(飛行機のナビゲーション、索敵、写真撮影、爆撃などを担う)になり、久子は勤労動員生として、海軍水路部で、天文航法をすばやく行うために必要な「高度方位暦」の計算に従事する。遠く離れた二人をつなぐ星。若き兵士たちが命を託す星。そして爆撃機を敵地へ導く目印になった星……。

和夫は、満天の星に包まれながら、自分が爆撃した相手にも、どうしても会いたい大切な人がいるであろうことに思い至る。沖縄戦出撃の前夜、久子にあてた最後の手紙に「星が武器としてではなく、希望の光として輝ける日がくることを祈っています」と、和夫は遺言を残す。

ベガの光は、今も変わることなく私たちの頭上で輝き続け、大切な何かを伝えてくれている。

## 2

### 番組が生み出された きっかけ・経緯

太平洋戦争中に飛行機が天文航法を使って飛んでいたということに加えて、「高度方位暦」なるものを女学生が計算していたという事実は、「ベガ」の制作を始めたころ、まとまった資料として残されているものは一つもなかった。

そもそもこの話に興味を持ったのは、塚越雅則さんとの出会いがきっかけだった。塚越さんは、戦時中、爆撃機銀河隊(攻撃501飛行隊)の要務士として戦闘記録や人事記録等の管理業務に携わっていた。当初、塚越さんから星空に関する質問を受けていたのだが、やがて、昭和19年の天測暦のコピーを持ってこられ、「これを当時の女学生が計算していたはずだから、どれだけ精度が高かったか調べてくれないか」との依頼を受けた。

それが何を意味しているのか、当初は全くわからず、またどのように調べたらよいのかもわからず、若干途方に暮れていた。けれども、そんな事実があったことに驚き、プラネタリウム番組のテーマになるのでは、という予感があった。塚越さんから話を



伺ったのは2004年のことだったが、それを番組にしようと動き出したのは2005年。それまで何本かのプラネタリウム番組制作を手掛けてきた高橋と、小学校の教員（当時、科学館にスタッフとして出向中）で日本の戦争の歴史に深い関心を寄せていた跡部が共同で調査・制作を進めた。

調査はまるで細い糸をたぐりよせるような作業であった。最初に手元にあったのは、塚越さんが書き残していた隊員の証言で、「銀河」の乗員が香取基地にいたとき、女学生が数値データを持って訪ねてくれたという記述、そして、『梓特別攻撃隊（神野正美 著 光人社 刊）』のたった1ページのコピーのみであった。とにかく当事者に話を聞かないことには、ということで、神野氏や海軍水路部に女学生を送り出していた都立第一高等女学校（現：白鷗高校）の同窓会、山梨県内の戦争体験者などを通じて、少しずつ出合いを広げながら、取材を進めていった（写真1）。



写真1（左から）「ベガ」制作するきっかけをくださった塚越雅則さん、水路部で計算をしていた元第一高女のみなさん（林 きぬ子さん、福永照子さん、林 恒子さん、杉田悦子さん）、女学生たちの作業に関する資料を集めていた田中医生さん。東京、九段の昭和館にて。

体験者の方々の話は、あの時代に人々が日常生活を過ごしていた、という当たり前の事実をあらためて私たちに教えてくれた。寝て、食べてという生活以外にも、他者とともに生きる、好奇心を持つ、恋もする、といった、ヒトを人間たらしめている要素が当然あったのだ、ということに気づかされたのである。一方、彼らの口から「君たちには想像もつかないよ」という言葉を何度も聞かされた。ある意味、世代間のどうにも埋めがたい溝があることも事実だった。けれども、戦争の記憶がどんどん薄れていく今、それを継いでいくのは、私たちの世代の責任とも感じていた。

### 3

#### 和夫の行っていた天測 「天文航法」

星空は時間という概念を生み出し、人々に自分の位置を教えてきた。何の目印もない海を渡るのに星を頼りにするというのは、数千年も昔から編み出された生きる知恵の一つである。

ポリネシアやミクロネシアの人々のスターナビ



そうだ、  
一つ約束をしよう。  
さびしい時や苦しい時には、  
あのベガを見上げるんだ。

「ベガ」の主人公である大学生の和夫と、女学生の久子は幼馴染み。和夫が入隊する前夜、二人はベガを「約束の星」に決めた。



太平洋戦争末期、男子学生が出征（学徒出陣）する中、女学生たちも学徒勤労動員され、軍需工場などで働いた。「ベガ」では女学生たちが海軍水路部で「高度方位暦」の計算に従事する。

みなさんの仕事は、  
星の位置を計算して  
「高度方位暦」  
というものを作ることです。



「ベガ、81度54分」  
「アルクトゥールス、27度24分」  
「フォーマルハート、5度42分」

「気泡六分儀」を使って星の高さを測る実習中の和夫たち。機体の進行方向に近い星と、その左右に120度ほど離れた3個の星を測るのが「天文航法」の基本。星の高さと時刻から暦と表を使って自機の位置を割り出す。



図1 サイパン攻撃の飛行コース。1944年(昭和19年)6月から7月にかけて、米軍はサイパン島、グアム島、テニアン島に進攻、同年11月から始まったマリアナからのB-29による日本本土爆撃の出撃基地とした。これに対し、日本海軍航空隊は千葉県香取基地から硫黄島を経由して長駆サイパン島の飛行場を攻撃した。制海権・制空権は米軍にあり、敵戦闘機の要撃や対空砲火を避けるために夜間爆撃を敢行する必要があった。「ベガ」の取材で話を伺った丸山泰輔さんが出撃したのは1944年12月25日。「ベガ」でも、和夫たちの「銀河」がサイパン島を夜間爆撃し、硫黄島に帰り着く。

レーションは、特に道具を使わずに、星の位置や並びを、風や波の状態とともに肌感覚として体得し、それにしたがって船を進めていたのだろう。数学の力によって星の位置を計算し、星の高さを測ることによって、自分たちの位置が決められることを体系的に行う、つまり天文航法(解説は28ページ)が編み出されたのは大航海時代であり、四分儀や六分儀といった星の高さを測る道具が出てきたのもこのころである。

戦時中、飛行機の位置を測る方法としては、天文航法、推測航法、無線航法、天文航法があった。特に長距離の洋上飛行をする海軍の飛行機では、推測航法と天文航法に頼るところが大きかった。天文航法のために行う「天測」で使う大事な道具は「気泡六分儀(写真2)」である。私たちは、偵察員だった丸山泰輔さん(甲種飛行予科練習生3期生)と、平山幸夫さん(同、写真3)に主に話を伺った。

「ベガ」のストーリーの中で、和夫がサイパン攻撃に出かけるシーンがある。丸山さんはまさしく、「銀河」でサイパン攻撃に出て、サイパン上空で敵戦闘機に追われながら方角を見失い、絶海の孤島である硫黄島へ帰るために天測を行い、数マイルの誤差でどんぴしゃりと帰りつくことのできた人だった(図1)。

そのとき、一緒に攻撃に出かけていった仲間の「銀河」の何機かは帰って来られなかったという。それが和夫の「帰りが満天の星に見守られ、僕たちは無事でした。けれども、仲のよかった同期生の乗った銀河はついに戻ってこなかった。このあいだ、一緒に星を見上げて、ふるさにとに残した大切な人の話をしたばかりだったのに」というセリフにつながっている。

その丸山さんが、「天測の神様」と呼んでいたのが平山さん。平山さんは、戦後も海上自衛隊や日本航空などに籍置き、人生を「天測」とともに歩んできた。平山さんは、航法について自筆の解説ノート(写真4)を用意して私たちの取材に応じてくれた。航法のことのみならず、番組中の和夫が偵察員席で言う「針路360度ヨロソロ」などひとつひとつの細かいセリフや、人物設定、人間関係のあり方にいたるまで、平山さんから伺った話は、番組の多くを支えている。和夫の「満天の星が海に映ってきらきら輝いてびっくりしました。君に見せてあげたかった」というセリフも平山さんの体験談がもとになっている。取材当日、ずっと横にいた奥さまの、「私は50年この人に連れ添ってきたけれど、こんな話を聞いたのは初めてです」という言葉が忘れられない。

戦争体験者の多くは、その記憶にふたをするように誰にも何も語らずに何十年を過ごしてきた。そして、平山さんの言葉を借りれば「仲間がみんな



写真2 戦時中に日本海軍の航空機で使われていた「気泡六分儀」。夜間、水平線が見えなくとも星の地平高度を測ることができた。



写真3 2008年、中央区タイムドーム明石での上映を見に来てくださった平山さん。気泡六分儀を手にすると、目の輝きが増し青年に戻ったかのようなだった。



写真4 航法の種類などについて解説した平山さん手書きのノート。



写真5 番組のエンディングに使わせていただいている、平山ご夫妻のお写真(熱海にて、平山幸夫氏提供)。



な死んでしまった。自分だけ生き残って申し訳ない」という思いを抱えながら生きている。話を聞かせてもらい、それを何らかの形で残していくこと、そのことで、その当事者の心の解放につながっていくこともあるということを気づかせてくれた体験であった。

番組のエンディングで、取材した方々の当時と今の写真を流しているのだが、もっとも印象的な一枚に、お宮の松の下に立つ男女の写真がある。平山ご夫妻の姿で、従軍中の幸夫さんの短い休暇中に撮られたものである(写真5)。

## 4 久子の行っていた計算「高度方位暦」

天文航法のためになくはないのが、正確な暦である。船や飛行機が無事に目的地に向かい、そして帰ってくるためには、何よりも暦が重要であった。日本海軍は戦前、「航空年表(天体暦の一種)」と「簡易天測表」を併用して使っていた。それら日本における暦の独立推算を進めていたのは海軍水路部で、1926年には航空天測専用の暦として世界最初のものを出している。

東京帝国大学天文学科卒の塚本裕四朗氏は、水路部において戦前、戦中、戦後にわたり、独立推算の効率化や各種の暦や表の改良に一生をさげた人物だ。戦況が悪化していく昭和19年、熟練の偵察員が次々といなくなる中、機上で面倒な計算をしなくてもすむように彼が中心となって開発したのが「高度方位暦(写真6)」だ。飛行の目的地を先に決めることで、「暦」と「天測表」の2つを使わなくても済む。

各基地における金星、木星、土星、13個の恒星の高度と方位が直接列記されている。この計算を短期間で行うには多くの人手が必要で、当時の都立第一高等女学校(現:白鷗高校)、都立第二高等女学校(現:竹早高校)、立教高等女学校(現:立教女学院)などの生徒が計算作業に従事することになったのである(写真7)。

女学生の学徒動員については、白鷗高校の卒業生で、かつお父さまが水路部で働いていたという田中匡生さんが精力的に集められていた情報が大変重要な資料となった。当時、実際に水路部で作業にあたっていた4名の女学生の方にもお話を伺った。当時の記憶をたぐり、手紙を寄せてくださった方もいた(写真8)。

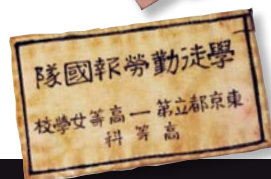
番組完成後には、さらに多くの元女学生たちと出会うことになる。書いていた数字がすべてイタリック体で今でも数字を書くときにはその書き方になること、海軍体操が楽しみの一つだったこと、みんなのあこがれの将校さんがいたこと……。



「ベガ」では、和夫と久子の手紙のやりとりで、話が展開する。その手紙とベガの光だけが、二人をつなぎとめてくれていた。



◀写真6 当時の「高度方位暦」。山梨大学の高橋智子准教授が原本を発見した。基地や緯度ごとに冊子が作られていた。記述されている恒星は、北極星、カペラ、ベガ、アルクツルス、レグルス、アルタイル、プロシオン、リゲル、スピカ、シリウス、アンタレス、フォーマルハウト、カノプス(表記まま)の13個。



▶写真8 当時のことをしっかりと記憶されている熊谷さんのお手紙。ご自宅からなかなか離れることができないとのことで、直接お会いすることはできなかったが、番組の参考になった。



▲写真7 東京都立第一高等女学校の佐久間久子さんより寄贈された当時の名札。



「ベガ」の番組中、サイパン島夜間爆撃に向かう「銀河」機上で、和夫が天測した星空。1944年12月25日17時50分(日本時)、日没から約1時間後を想定している。フォーマルハウト/ベガ/リゲルの高度を測り、機位を得た。



写真9 2014年版の監修をお願いした井上圭典さんと、奥さまの宏子さん。2014年4月撮影。

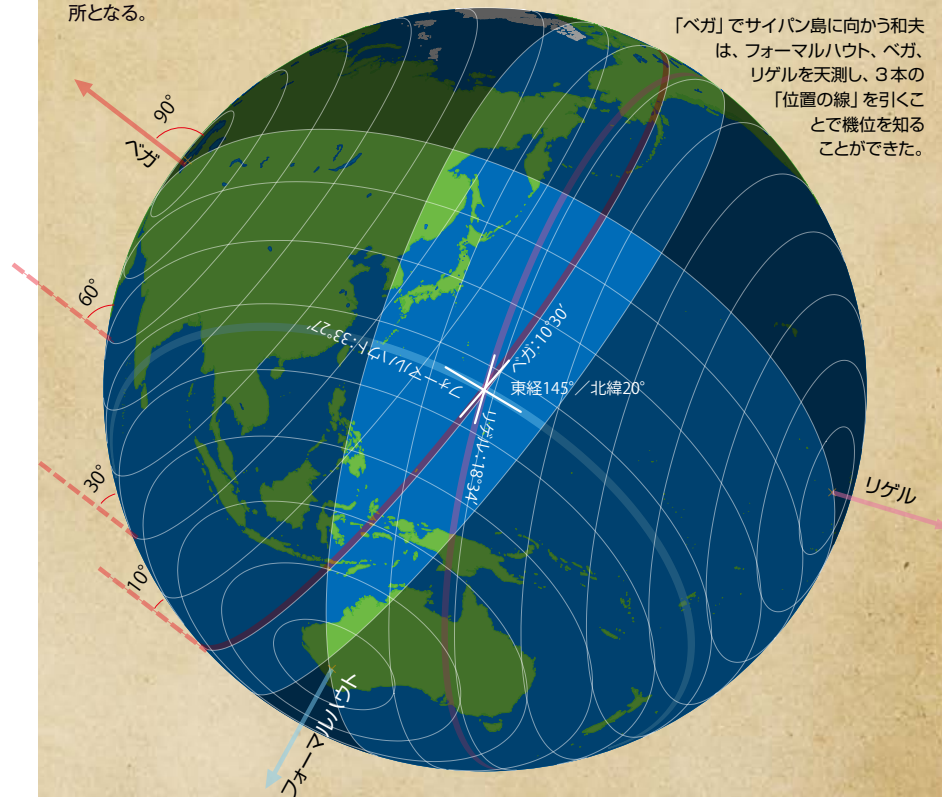
写真10 1944年(昭和19年)秋、立教高等女学校の校舎を背にした海軍水路部職員たち(星の友会提供)。



立教高女内  
水路部天文科  
(十九年)

## 天文航法(天測航法)

天体の高度を測って船や航空機的位置を割り出す方法。決まった時刻にある星が天頂に見える地点(星の地位)は地球上に1か所しかないが、ある高度で見える地点は、その地位を中心とした円(位置の円)を描く。この円は直径が数千kmという大きなものなので、地図上に表す場合には直線として描かれる。これが「位置の線」。複数の星の高度を測って位置の線を引くと、それは1点で交わる。そこが観測者のいる場所となる。



「ベガ」でサイパン島に向かう和夫は、フォーマルハート、ベガ、リゲルを天測し、3本の「位置の線」を引くことで機位を知ることができた。

番組の特別展に海軍の制服が展示されているのを見て、一気に少女の瞳に戻っていく様子には驚かされた。彼女たちの証言は、番組中の水路部職員のセリフ「みなさんが計算を間違えると飛行機は迷って落ちてしまうことを肝に銘じてがんばるように」や、久子の「水路部で計算をしていて気になることがあります。それは計算をする基地がどんどん北よりになって本土に近づいてくるのです」につながっている。

しかし、私たちは2006年の番組制作時、これに関して大きな間違いをしていた。「高度方位暦」を「航空天測表」と伝えていたのである。番組ができあがった後に会った、元水路部職員の金子秀さんに「航空天測表」の間違いを指摘されて気づいたのである。金子さんは80代半ばながらしっかりとした語り口で、ていねいに天文航法の原理や「高度方位暦」とは何かということについて詳しく解説してくださった。

さらに、戦後すぐに水路部に就職し、天文計算にすべてを費やしてきた井上圭典さんの助言を得ることもできた。井上さんは、深く「ベガ」の物語に興味を持ち、女学生が具体的に何をやっていたのか、それらがほんとうに機上で使われていたのかどうかを探るだけでなく、番組の深層部分を制作者以上に分析した人でもある。井上さんの言葉によって、「ベガ」が持ちえたテーマの深さに逆に気づかされた面がある。

同様に、甲府在住の comet ハンター 三枝義一さん(「鈴木・三枝・森 彗星(1975年)」「菅野・三枝・藤川 彗星(1983年)」を発見)からも、多くの教えを受けた。三枝さんも天文計算とともに生きてこられた人で、和夫が何をやっていたか、久子がどんな計算をしていたのか、様々な図を描いて説明してくださった。残念ながら三枝さんは2012年に星になられたが、三枝さんと井上さんは、「ベガ」を通して知り合い、天文計算の同志として実に頻繁に手紙をやりとりされていたと伺った。

井上さんには、2014年度版の監修をお願いした。戦時中は出征するほどの年齢ではなかったにも関わらず、番組をご覧になった井上さんは、「こういうのを見ると生きていて申し訳ないという気分になる」との思いを語られた。「主人が生涯をかけてきた天文計算のことや平和運動のことが、こうやって形になって、世の中のみなさんに見えていただけること……このために主人は生かされていたと思います。感無量です」。井上さんの思いを聞いた奥さまの言葉だ(写真9)。ここでも、平山さんのときと同じように、「ベガ」は一人ひとりの人生に深く関わることのできる作品だと気づかされた。

また、「高度方位暦」に関しては、「ベガ」がきっかけとなって、大きな発見があった。科学史が専



門の山梨大学の高橋智子准教授によって、「幻の暦」とされていた「高度方位暦」の実物が水路部（海軍水路部は、戦後運輸省の管轄となり、2002年には「海上保安庁海洋情報部」に改組された）の倉庫から掘り起こされたのである。この発見によって、採用されている星の種類や記述のされ方がわかり、女学生たちが具体的にどんな計算をしていたのか、推測することができるようになった。

その後、計算に関わっていた女学校についてさらに調査を進め、それを史実としてまとめた神野正美氏によるノンフィクション『聖マールガレット礼拝堂に祈りが途絶えた日―戦時下、星の軌跡を計算した女学生たち』（光人社 刊）の出版につながっていった。

## 15 戦争という時代を 星の視点から見つめる

星空は地球上の生命が共有できる唯一の風景である。どんな時代にも、それを見上げてきた人がある。逆に星空は、地球上で起きているさまざまな出来事を俯瞰している。それゆえ、星空はすべてをつなぐ力を持っている、そんな思いに至ったのは、この「ベガ」を生み出したときだったかもしれない。

この番組を構成している軸に、男と女、加害と被害、当時と今、という対がある。それをすべて引き裂くのが「戦争」であり、すべてを超えてつなぐことができるのが「星」だとこの物語は伝える。プラネタリウムという場において、戦争というテーマを扱うことの難しさや、それに対する抵抗感のようなものは制作当初にあったが、これはプラネタリウムでなければできなかった物語でもある。プラネタリウムを見た人たちの心に、いわゆる「戦争もの」を見たときの鉛のように重いものを残すわけにはいかなかった。だからこそ、星空は人を救うことができるという視点が大事だったのだ。

一方、この物語が、どこか遠い昔のお話ではなく、「自分に続く物語」であることを、大人にも子どもにも感じてもらう必要がどうしてもあった。見る人に、いかに「自分化」してもらうか。大切な人が奪われていくことの無念さは、きっと誰もが肌で感じるができることだろう。山梨県内の戦争体験者の女性にインタビューしていたときのこと。「好きな人はいた?」と聞いたときに、「そりゃ、いたさよー」とその瞬間にぼろぼろと涙を流しておられた。誰もが大切な他者なしには生きていけない。戦争はそれを奪っていくものだ、というメッセージは自ずと生まれていった。

日本の戦争被害だけでなく、加害の立場を少

戦争には  
勝ちも負けもない。  
どちらも  
失うものばかりです。

1944年12月25日、海軍の航空隊がサイパン島のアスリート飛行場（米軍によってイズリー飛行場と改名、現サイパン国際空港）を夜間爆撃し、B-29数機に損害を与えた。「ベガ」では、和夫が飛行場を爆撃しながらも「敵にも大切な人がいる」ことを思う。



陸上爆撃機「銀河」の上に立つ搭乗員（榎本哲氏提供）。



「ベガ」で、和夫は久子への手紙に「（乗機の）銀河は高性能の新型機」と記している。



## 銀河

横須賀海軍航空技術廠が開発した双発陸上爆撃機。1940年（昭和15年）に開発が始まるも、制式採用されたのは太平洋戦争の敗色も濃くなった1944年（昭和19年）10月。機種に「陸上」とあるが、陸上に爆撃するというのではなく、陸地の航空基地から飛び立つ爆撃機の意（ちなみに、空母に搭載される爆撃機は「艦上」爆撃機と呼ばれる）。速度を戦闘機並みの最大550km/hに、航続距離を一式陸上攻撃機と同じ5500kmにとの開発要求を満たすため、乗員を操縦手／通信士（後方機銃手を兼ねる）／航法・偵察員（前方機銃手を兼ねる）の3名（一式陸上攻撃機は通常7名）とし、胴体をスリム化、防御兵装も最低限にした。操縦手／通信士が乗る操縦席は胴体上にあり、機首には索敵・航法（天測）・爆撃を受け持つ偵察員席がある。終戦まで約1,100機が作られた。（編集部）



索敵・航法（天測）・爆撃・前方機銃を受け持つ「ベガ」の主人公・和夫は、大きな窓に囲まれ、視界の開けた機首の偵察員席から、「満天の星」を望むことができた。

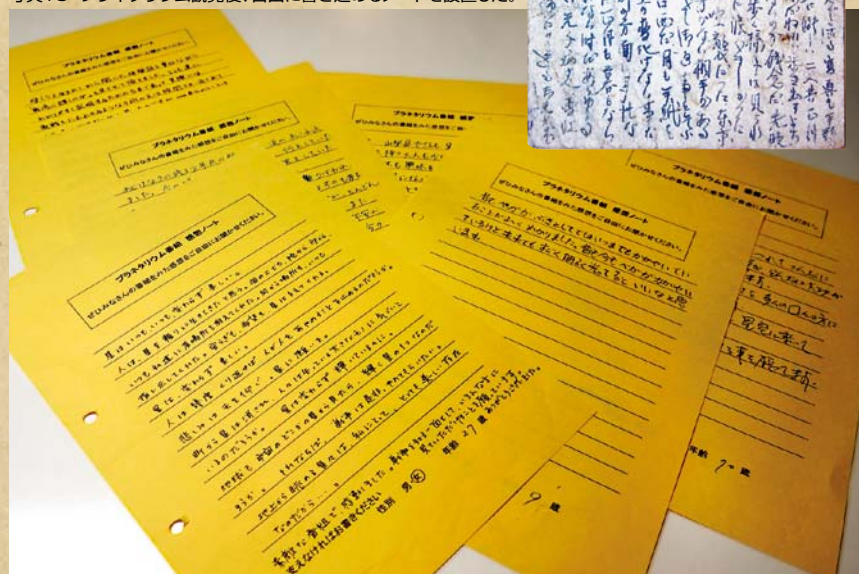




写真11 杉原五十子さんのお父さんの遺品の「日の丸」。左上に、お母さんの「三ツ星」を歌う短歌が書かれている。

写真12 杉原さんのお父さんが、戦地からお母さんにあてた手紙。お子さんの成長を喜びながら、「其れから、・・・星も夕方は東の方に見え朝方は西だ。月も手紙を見た時は」〆形に成って居た。内地とは大して空の変化はない事だらふ」とあり、「三ツ星」のことを「・・・星」と表現している。

写真13 プラネタリウム観覧後、自由に書き込めるノートを設置した。



#### ■「戦場に輝くベガ」のスピノフコンテンツ

- 「戦場に輝くベガ」約束の星を見上げて  
鈴木一美・浅野ひろこ 著 一光舎 刊
- 「聖マーガレット礼拝堂に祈りが途絶えた日」  
戦時下、星の軌跡を計算した女生生たち  
神野正美 著 光人社 刊
- 「約束の星—星といのちの物語」  
小林真人オリジナルCD（「ベガ」のサウンドトラック11曲を含む19曲を収録）



※いずれもamazonで購入可

しても伝えるというのも制作を始めた当初からの想いの一つだった。サイパン攻撃において和夫が落とした爆弾の下で、米兵が逃げまどう絵を入れたのはそういう意味があった。

取材相手の一人に、自らが中学時代に甲府空襲にあって父母を失い、命からがら生き延びた後に民間航空機のパイロットとなって活躍した諸星廣夫さんがいる。彼は、旅客機のパイロットとして何度もサイパンから御前崎に向かう航路を飛ぶ中で、甲府に焼夷弾を落としていったB-29の乗員は何を考えていたのか? と思い、そのパイロットを探しあてた。甲府を襲ったときの様子を聞いたとき、その米兵は、「Nothing is eventful. (特別なことは何もなかった)」と答えたという。はるか上空を飛び爆撃をする彼にとっては特別なことは何もなかった……。その下で繰り広げられる地獄絵を想像したら、誰もが爆弾投下ボタンを押すことなどできなかったのかもしれない。

戦争はそういった想像力をいっさい断ち切るものとも言えるだろう。和夫も同じだったに違いない。けれども、和夫はサイパン攻撃の帰りに、満天の星につつまれながら久子を想い、「はくが爆撃した敵にさえ、どうしても会いたい大切な人がいる」と思い至る。人間としての生への希望や尊重の念、圧倒的な星空はそれを思い出させる力を持っているはずなのだ。

「ベガ」は、さまざまな史実に基づきながらも、モデルとなった特定の人物がいるわけではない。しかし、その物語を実体験していた方に、制作後お会いするということが何度かあった。2006年に山梨で上映している時、水路部で計算をしていたという女性4名が東京から山梨まで見に来られたことがあった。その中の一人から、「私にも沖縄戦で亡くなったフィアンセがいたのよ。今でも手紙をとってあるわ。主人には内緒だけど」というエピソードを聞くことができた。

また、山梨県内にも、約束の星を決めて手紙のやりとりをしていたご夫婦がいたことを知った。ご主人は、硫黄島で戦死。その際、携えていた寄せ書きの日章旗(写真11)が、後年ご遺族の元に届けられた。その寄せ書きの一つに、「三ツ星の中の一つを 夫なりと タベの星を 懐かしと思ふらん」と奥さまが書いた歌がある。ご主人が奥さまに宛てたはがきの中にも三ツ星のことが書かれていた(写真12)。「母はいつも夜になると一人で外に出る時間がありました。いったい何をしているのだらうと思っていましたが、オリオンの三ツ星を見ていたんだと知ったのは、もうだいぶ後になってからのことです」と、ご夫婦の息子さん

さんの杉原五十子さんから伺った。

「ベガ」は、今の自分に続く物語。何よりも、今夜、私たちはベガを見上げることができる。その



光は、連綿と続いてきたいのちが、あそこで途切れていたら……つまり、自分の父母が、祖父母が、この戦争で命を奪われていたら、今の自分はいなかったということも教えてくれる。

番組を見て、「祖父母に話を聞いてみようと思った」「母に見せてあげたい」「孫たちに戦争のことなんか話してもしようがないと思っていたけど、これを一緒に見れば話ができるような気がする」というように、家族と戦争の話をしよう、聞いてみよう、というアクションにつなげた人も少なくない(写真13)。ある高校の先生は、「彼氏、彼女と一緒に必ず見なさい」と生徒たちを促した。展示パネルに書かれた時代背景について、細かくメモをしていく方も多い。このように「ベガ」は、さまざまな場面で、新たな出会いやコミュニケーションを生み出してきた番組でもある。

## 16 終わらない物語

「ベガ」は終わらない物語である。それは、見てくださった方々の「終わらせない」という想いに支えられているとも言える。一般市民の方が、もっと「ベガ」を知ってもらいたい、とボランティアで調査や企画を行い、多くの展示パネルを制作した。その力に支えられ、他のプラネタリウム館での上映も行われた。「高度方位暦」の発見や史実を深めた本の出版は前述した通りだが、それ以外にも、「いつか映画にしたい」と熱く語った映画プロデューサーが書き手となって、小説『戦場に輝くベガ(鈴木一美・浅野ひろこ著 一兎舎刊)』も生まれた。「ベガ」を原作にしたNHK FMシアターのラジオドラマ「天空の道標」もオンエアされた。完全リメイク版の音楽は、山梨県出身の作曲家・ピアニストの小林真人氏による書き下ろしである。そのサウンドトラック全曲が収録されたアルバム「約束の星 ― 星といのちの物語」も発売中。テーマ曲「約束の星」は、「ベガ」が持つメッセージをすべて集約したような歌であり、その歌を中学生・高校生が歌っていることが、「ベガ」を、再び終わらない物語にしている。

今回、リメイク版として制作されたものは、完全デジタルバージョンなので、プラネタリウム館だけでなくいろいろな会場で上映することができる。来年は戦後70年を迎える。当時のことを知る人たちは、ほんとうにわずかとなり、日本は人々の願いとは違う方向へ進んでいるようにも見える。だからこそ、一人でも多くの人たちに「ベガ」をご覧いただき、自分の中にその物語を発見してもらいたいと願っている。ベガを「希望の光」にするのは、今を生きる私たちなのだ。

1945年5月25日 「ベガ」の和夫は、鹿児島県の鹿屋基地(現海上自衛隊鹿屋航空基地)から、沖縄沖の米艦船を攻撃すべく飛び立った。最後になってしまった手紙に、「星は希望の光であってほしい」という願いが託されていた。

星が武器としてではなく、希望の光として輝ける日がくることを祈っています。

### ■「戦場に輝くベガ」のこれまで

|      |                                                                                                                                        |
|------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 2004 | 塚越雅則さんから「戦時中に天測暦を女学生が計算していた」ということを聞く。                                                                                                  |
| 2005 | 星の語り部(科学館ボランティア)による手作りプラネタリウム作品「変わらぬ星を見上げて」の上映。                                                                                        |
| 2005 | 10月 取材スタート。                                                                                                                            |
| 2006 | 4月 「戦場に輝くベガ」上映開始。                                                                                                                      |
|      | 9月 「戦場に輝くベガ」上映実行委員会発足。                                                                                                                 |
| 2007 | 「あすたむらんど徳島」(徳島県徳島市)で上映。                                                                                                                |
| 2008 | 「タイムドーム明石」(東京都中央区)で上映。特別展も開催。<br>「福島市子どもの夢を育む施設こむこむ」(福島県福島市)で上映。関連企画展も開催。                                                              |
| 2009 | 「ジミーカーター・シビックセンター」(広島県三次市)で上映。                                                                                                         |
| 2010 | 山梨大学の高橋智子准教授が「高度方位暦」を発見。<br>「高松市民文化センター」(香川県高松市)で上映。<br>番組を原作とした小説『戦場に輝くベガ』鈴木一美・浅野ひろこ 著(一兎舎 刊)出版。<br>サイエンスアゴラで、上映実行委員会が「天測ワークショップ」を行う。 |
| 2012 | ノンフィクション「聖マARGERITT礼拝堂に祈りが途絶えた日ー戦時下、星の軌跡を計算した女学生たち」<br>神野正美 著(光人社 刊)出版。                                                                |
| 2013 | 番組を原作としたラジオドラマ「天空の道標」(NHK FMシアター) オンエア。                                                                                                |
| 2014 | 完全リメイク版「戦場に輝くベガ」上映。                                                                                                                    |

## プラネタリウム番組 「戦場に輝くベガ ―約束の星を見上げて―」

ナレーション: 谷 育子、木島隆一、Lynnほか  
考証協力: 井上圭典、神野正美 音楽: 小林真人  
テーマ曲合唱: 山梨学院大学附属中学校合唱部・山梨県立日川高校吹奏楽部  
音響演出: 前嶋慶太 イラスト: 秋山近史、石本光男 映像演出: 今野利秋  
脚本・演出: 跡部浩一・高橋真理子 制作協力: 五藤光学研究所  
著作・制作: 山梨県立科学館

### ■山梨県立科学館

～7月18日(金) 毎日16:00～ (休館日: 月曜日)

<http://www.kagakukan.pref.yamanashi.jp>

### ■滋賀県平和祈念館

8月11日(月)～17日(日) 各日午前・午後上映

<http://www.pref.shiga.lg.jp/heiwa/heimuseum/>

### ■著者プロフィール

高橋真理子(由先案内人)

山梨県立科学館天文担当として16年間勤めたのち、2014年に独立。ピアニストとのコラボライブSpace Fantasy Liveなど星空や宇宙を届ける活動を軸に、星空工房アルリシャ(<http://alricha.net>)を立ち上げる。山梨県立科学館天文アドバイザー。山梨県立大、日大芸術学部、帝京科学大学、非常勤講師。

跡部浩一(ライトダウンやまなし実行委員会事務局)

山梨県内の小学校で教鞭をとるかたわら、星空工房アルリシャの活動を高橋とともに。街の明かりを消して美しい星空を取り戻す活動「ライトダウンやまなし」の中心を担う(2014年から「ライトダウン甲府バレー」を「ライトダウンやまなし」と改称)。

